

単価とともに質も急降下 日本の葬儀の劣化を問う！

行政書士・葬祭カウンセラー 勝 桂子

流れ作業の通夜

『葬式は、要らない』（幻冬舎新書）という本が世に出たのは九年前。著者の島田裕巳氏は宗教学者で、特別に宗教に関する知識があり、意識も高いのだから、葬儀がなくとも人の死を受容することができるのだろ

う。だが多くの一般人は、葬儀を経なければ死別の事実が腑に落ちない。だから私は「葬式は、要る！」と、心のなかで絶叫した。だが今、都市部の通夜葬儀はその内容が急速に劣化しており、参列する意味を感じられない場合すらある。

費用を抑えた直葬パックだから、というわけではない。火葬費込みで

七十万〜二百万円程度かけていると思われる一般葬の質さえ、非常に劣化しているのだ。

昨年来、四度連続で、列席したお通夜は腑に落ちるものではなかった。親族ではない、少なからず縁のあった人の突然の訃報。死別の衝撃を胸に故人との思い出を反芻しつづ、降りたことのない駅へと足を運

ぶ。受付票に記名をし、香典を差し

出し席につく。開式（読経開始）から十分とたたぬ、外気との温度差によりやく慣れたばかりのころ、「お焼香をどうぞ」と席を立たされる。後の法話を拝聴しようとして、手荷物を席に置いて焼香の列に並ぶも、済んだところへ私の手荷物を抱えた葬儀社の人が待ち構えており、「お席にはお戻りにならず、二階のお斎の席へどうぞ」と強制連行だ。慇懃無礼な二重敬語で、さらに故人を悼む気持ちが薄れてしまふ。

階上の会食席に到達すると、「奥から詰めておかけください」と言われる。遠くに知人の顔がみえるが、会葬者がぎつしり詰めて座っているので、近寄って話しかけることもできず、視線だけ交わして会釈をする。見知らぬ人の間で、一つ二つだけ煮物をつまみ、手酌のウーロン茶での

どをしめらす。

しばらくすると、焼香が終わったのか読経の調子が変わる。そろそろ法話が始まるのではと席を抜ける。お斎の和室を出て靴をはくと、待っていましたとばかりに葬儀社のメンバーが白い紙袋を手に、「受付でお渡しした引換券をお出しください」と言う。「法話を拝聴してもよいでしょうか？」と尋ねると、予想外の質問に驚いたのか、少々お待ちくださいもなしに上司らしき人のところへ行行って、コソコソと何やら相談している。戻って来ると、いかにも特段はからって差し上げましたという表情で、「本来はこのままお帰りいただくのですが、特別に、本堂へ戻っていただいても構わないとのことでございます」。

私は法話を拝聴するのが好きなので迷惑がられても戻るのだが、昨今

の都会の通夜では、法話は家族のためだけにあるのであって、友人知人は聴いてはならないものらしい。

この流れ作業の通夜に、いったい何の意味があるのだろうか？ それならば葬儀に出ればよいのか。葬儀であれば、さすがに全員に向けての法話もあり、別れの言葉なども聞けるし、棺への花入れも体験できるだろう。しかし忌引休暇を取れる間柄でもない友人知人が亡くなった場合、日中に行われる葬儀に出ることは難しく、こと都市部において、葬儀は自然と親族だけの場のように理解されていることも多い。また葬儀には通夜よりも豪華な一人前の食事が用意されることが多く、赤の他人がこのこ出て行つては、人数外で迷惑になる。

通夜がこのようにせわしなくなつたのは、葬祭業者のせいばかりとは

いえない。年間に亡くなる日本人の数が増え、どこの葬祭ホールもスケジュールが分刻みになってきていることが主因と思われる。しかしこのような通夜式が当たり前になれば、寺離れよりも先に、「葬祭ホール離れ」が起こっても仕方がない。

前述のような通夜のほかに、昨年は一度だけ、直葬への参列も経験した。自死を選んだ四十歳代の相談者との別れだった。実はこちらの方が故人との面前のお別れもでき、納得のいくお別れであった。儀礼としての力も、その斎場では感じられた（東京都内の某斎場）。職員の純白の制帽と折り目正しい制服は非日常を感じさせ、参列者の気持ちを引き締めさせる。窯を閉めたあとの深い敬礼、ご遺骨をすくいとり、骨壺へ収める動作の無駄のなさ、その骨壺を桐箱に入れ、包みあげる優雅な手元。す

寺での骨葬を

その「死別を今後を生きることへ活かしていく意義」とはどういうことか。それは「ゴールが見えてこそがんばれる」という人間の本質を考えれば、よく分かる。ゴールもない、設定距離もないが、「ともかく全速力で走ってください」と言われても、本気を出せる人はほとんどいない。多くの人は「死んだ時どうなっていたいか」が見えさえすれば、人生をもっと、とことんがんばることができるのである。昭和のころの定型の葬儀には、その価値があった。その価値をとり戻すため、私は「お寺での骨葬」を推奨している。

冒頭に挙げた流れ作業的通夜のうち一件は、地元の行政書士会の大先輩（元支部長）のもので、導師はたま

べてが故人への敬意を感じさせ、美しく、参列者の視線をつかんで離さない。それはまぎれもない「儀式」であった。少なくとも、流れ作業式の一般葬における通夜のいずれよりも、人を葬るにふさわしい重々しさにあふれていた。

葬祭離れにせよ寺離れにせよ、その要因は、葬祭業者や宗教者が、「死別を今後を生きることへ活かしていく意義」について、深く感じ、考えることが少なくなったところにあるのだと私は考えている。何十万というお金を払うのに、特別の意義が感じられない、ただこなすだけのイベントであるならば、「葬儀は要らない」と考える人が増えてしまうのも仕方ない。

現場からの体感として、家族葬が大半となったここ十年で、葬儀の平均単価は十万円ほど減少していると

たま懇意にしている地域仏教会の会長だった。後日、メールで「会葬者がベルトコンベアーに乗せられたように葬祭スタッフの言う通りの動作をこなし、悼む間もなく終わる昨今の通夜の方法についてどう思われますか？」と尋ねてみた。僧侶側も、こうした通夜式のありかたには多大な疑問を持っているとのことだった。当然だろう。懸命に考えた法話を話そうといざ振り向けば、会場の大半は空席。十人に満たない親族しかいなくなっているのだから、虚しさひとしおのはずだ。

以来私は僧侶研修の講師に呼んでいただくたび、骨葬の推進を提唱するようになった。骨葬とは山形県や北海道、九州で、沿岸部など漁業の多い一部地域で伝統的におこなわれる葬儀の方法である。先に火葬をしてから、骨壺を前に葬儀をおこなう

聞く。中小の事業者では従業員に給与を払えず一人親方となり、仕事を誰にも引き継げないため高齢になると廃業を余儀なくされるといふパターンが珍しくないという。結果的に大手だけが生き残るわけだが、彼らの多くは、すでに家族葬が中心となつた後で結婚式業界など他業種から参入しているため、以前の葬儀の流儀も知らず、葬儀の意義についてもあまり感知していない。「お客さまのご希望通りにいたします」とあたかも顧客ファーストのように言うが、実態は「通夜で語らうことに、人の人生を左右するほどの意義がある」ということを知らず、知つても伝える力がないだけ。結果、経費削減のため流れ作業の葬儀になるわけだ。対して、きちんとした葬儀内容の提案ができる葬儀社では、単価はさほど落ちていないと聞く。

式だ。火葬の前に通夜だけ行う場合と、通夜も火葬後に行う場合とがあり、この辺りはケースバイケースである。近年では「都市部で亡くなつたが墓地が郷里にあり、列席する親族も郷里に多いため、搬送費を抑えるため火葬を先にして骨壺で持ち帰ってから葬儀をする」というケースなど、特定地域でなくても、結果的に骨葬となる形の葬儀を選択する場合も出てきている。

これをさらに拡大し、菩提寺が近くにあってもあえて葬儀社に頼むプランとしては直葬を選択してもらい、炉前で僧侶に引導をわたしていただく（浄土真宗など例外あり）。そして四十九日忌や納骨のとき、寺へ友人・知人なども呼んでゆっくり骨葬を行い、ともに食事もし、ゆっくり語らう。葬祭ホールのように時間制限を気にすることなく、昔の通夜式

と同じように、参列者たちは故人との思い出を数時間かけて存分に語らうことができる。日程も、余裕をもつて大勢が参加できる日を選ぶことができる。幼い孫たちはかたわらで遊びながら、祖父母の思い出話を耳に挟み、自分たちの印象とは異なる故人のさまざまな表情（職場ではこうだった、ああだった。幼いころはこんな悪さをした。あんなエピソードもこんな事件もあった、などなど）を知る。

葬儀の意味は、まさにここである。一人の人間について、どんなに親しくとも、知り得ているのは、限られた「部分」でしかない。友人知人が集って語り合うところでピースとピースが集められ、故人の人生のジグソーパズルを組み立てるように、その人格が何倍にもふくらんでゆく。幼い子ども端でそれを聞くととはなしに聞いて、人には多数の側面が裏

表となつて存在していること、たとえば怖かったおじいちゃんも若いころにはヘマをしたり、仲間うちで愛嬌をふりまいていたり、上司として慕われていたりしたことを知る。

このような葬儀であれば、親族は「祖父母（あるいは両親、伯父、叔伯母など）に恥じないよう立派に生きていこう」、あるいは、「死んでから人が集つたとき、恥じない人生にしよう」と気づく契機になりうる。昭和のころの葬儀とは、全国どこでもそうであった。

しかし、昨今好んで選ばれる家族葬では、家族の内輪の、これまでに何度も聞いたことのあるエピソードしか出てこない。よく見知った故人のまま、昨日まで一緒に食事をしてきた姿のまま、お別れすることになる。親族は、幼少期の逸話や会社での顔を知ることができる唯一の機

会を逃してしまふ。幼い孫たちにも人生の機微が伝わることなく「人間は、あつけなく死んでしまふ」という虚無感だけが残ってしまいかねない。

ペット供養に学べ

「生活のために」と言いながら、ペット供養の読経を引き受けている友人の僧侶が言った。

「ペット供養なんて、本当に必要なのかと思うでしょう。私も最初はそうでした。動物は我欲もないし、何もしなくても成仏できますよ。でも、ここには供養の原点があります。だつて人間の葬儀でいまだとき、あんなに泣く人はいませんから」

彼が導師をつとめるペットの合同供養（彼岸供養）を見学した。春秋のお彼岸ごとに二百人もの参列者があ

り、毎回参加するというリピーターが半数近くにのぼるといふ。人間の墓もすぐ近くにあるが、「そつちは五年に一度くらいでいいです」という声も聞かれた。

毎日エサを与え、語りかけ、悩みを吐露すれば傾聴してくれた。ペットとの別れ。思えばそれは、親子より濃密な関係なのかもしれない。号泣してなお癒えないグリーフ（苦しみ）が数年続く人もいる。自営業が激減して親子が同じ職業に就くことは稀になつた今（厚生労働省の調査「平成三〇年国民生活基礎調査 六十五歳以上の者のいる世帯の状況」によれば、子夫婦と同居する高齢者の割合は一九八六年の四六・七%から、二〇一八年には二〇・四%にまで落ち込んでいる）、親子は仕事上の苦楽を共にすることもなく、人生観を語らうこともほとんどない。そのような希薄な関係しか築けなかつ

た親の葬儀より、ペットの葬儀が隆盛になる——これは、人間社会の構造の問題だ。

ペットの葬儀供養では参列者が真剣そのものであるから、僧侶も葬祭業者も手を抜くことができない。提供されるサービスも、求めに応じて年々手厚くなつてゆく。そう、葬祭業の趨勢（うねり）の力ギを握るのは、お金を払う立場の側なのだ。ひとりひとりが、物言わぬペットにだけ悩みを吐露するのではなく、心を開ける人間関係を再構築していくこと。それに対応して業界側も、家族葬で弾かれてしまう友人知人のグリーフにいかに対応すべきかを考え始めるべきだろう。遠くの親族以上に、職場で苦楽をともにした仲間や、地域活動で毎週対話してきた人々にも、死を悼む場が必要だ。

独居者が増え、血縁であつても必

ずしも故人と近い関係者とは言い難くなつた社会の構造に、いまの葬祭現場はついていくことができている。と同時にわれわれは、自身の最期を弔ってもらえる人間関係を築くことを、もう少し真剣に考えながら生きるべきではないのか。社会がアノニマス化（匿名集団化）し、家族の絆は希薄になるなか、われわれはどこにつながりを求めるべきなのか。ひとりひとりが、それを意識しながら生きていかねばならないのかもしれない。

すぐれ・けいこ◎一九六五年東京生まれ。行政書士、ファイナンシャル・プランナーとして遺言・相続・改葬などの業務を行う。全国各地の僧侶研修などに講師として登壇。東京観光専門学校葬祭ディレクター学科非常勤講師。著書に『心が軽くなる仏教のつきあいかた』（啓文社書房）など。

宗教の視点から社会をえぐる
ノンフィクション・マガジン

宗教問題

Vol.27 季刊2019年夏季号

トルコ◆どうなるエルドアン政権!!
インド◆ヒンドゥー教至上主義の現在
インドネシア◆大統領選後の宗教大暴動

森ユースケ
三輪博樹
中田 考

ワールド・ウォッチ

特別読み物 異色の神主たちが変える神社の明日
神主たちの新しい神社づくりの最前線

古川順弘

特集
葬儀社大倒産時代
多死社会の中で沈没する「死の儀礼」の世界の今
佐藤信頭 VS 八田知巳 新旧葬儀社方チンコロ対談
葬儀業界をダメにしたのはどこのどいつだ!!
葬儀業者の淘汰は避けられぬ時代の流れだ
M&Aの嵐が葬儀業界にもたらすもの
日本最大の葬儀社ベルコのブラック労働裁判
ポルノ企業DMMはなぜ葬儀業に参入したか

碑文谷 創
吉川美津子
小笠原 淳
本誌編集部

迫真レポート

公明党の参院選躍進 中山雄二
神社本庁総長の4選 伊藤博敏
真宗大谷派でまた人権侵害 本郷四朗

宗教問題 27 葬儀社大倒産時代



ISBN978-4-9910002-6-3
C0014 ¥926E

宗教問題
定価 926円+税

コラム
兵頭二十八/大月隆寛/慈永祐士/広尾晃
特集 葬儀社大倒産時代
碑文谷創/吉川美津子/勝桂子/佐藤信頭/
八田知巳/小笠原淳/岸田太
特別読み物 異色の神主たちが変える神社の明日
古川順弘
World Watch
中田考/三輪博樹/森ユースケ
迫真レポート
中山雄二/伊藤博敏/本郷四朗
シネマ&ブック
三浦小太郎/佐藤信頭
連載
富岡幸一郎/東佑介/堀雅昭/和田正

宗教問題 27